

<実践報告>

「外国籍児童生徒教育論」の授業実践
—ふりかえりからみえてくるもの—

徳井厚子 信州大学教育学部言語教育講座

Evaluation of the “Theories on the Teaching of Foreign Children” Course

TOKUI Atsuko: Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	外国籍児童生徒教育論の授業に見られる学生の気づきと学び
キーワード	外国籍児童生徒 ふりかえり 認知・行動・情動的側面 批判的内省
実践の目的	外国籍児童生徒教育論
実践者名	著者
対象者	信州大学教育学部生
実践期間	2007年10月～2008年1月
実践研究の方法と経過	当授業は、教育学部国際理解教育分野の分野科目として開講している外国籍児童生徒に対応するための教員養成の授業である。授業後に行なった自由記述式のふりかえりシートから、学生の学びや気づきがどのようにみられたかについて考察した。
実践から得られた知見・提言	ふりかえりの気づきから、受講者は、子どもの発達や支援のあり方について認知的な側面だけではなく、行動的、情動的な側面においても気づきや学びが見られた。また、当授業が、地域などで行なっている外国籍児童生徒への支援の批判的内省の機会を提供していることも明らかになった。さらに支援や理論の限界に触れる等批判的な気づきも見られた。

1. はじめに

近年、国内では外国籍住民の数が増え、それに伴い小中学校における外国籍児童生徒も全国的に増加し、教員養成の現場においても「外国にルーツを持つ子どもに対応する教員の養成」が必要になってきている。長野県においては、外国人登録者数は現在約 43000 名であり、日系ブラジル人の数がここ 10 年間で約 70 倍に増加するなど、外国籍住民の人口が急速に増加している。こうした中、小中学校における教育現場においても「日本語が必要な児童生徒」の数が増加し、対応に追われているのが現状である。

当教育学部では「外国にルーツを持つ子どもに対応する教員養成」のための授業科目をいくつか開講している。本稿では、このうち国際理解教育分野において分野選択科目として開講している「外国籍児童生徒教育論」の実践報告を行ない、学生のふりかえりシートからどのような気づきや学びが見られたかについて考察するものである。

2. 授業概要

「外国籍児童生徒教育論」は、外国にルーツを持つ子どもに対応できる教員を養成するための科目として 2001 年より開講している。当科目は、バイリンガリズム等の理論の学習だけでなく、理論を批判的に読み取ることの育成や、参加者同士の話し合いを取り入れる等、学生相互による対話や協働的学びも重視している。また、中国の教科書を実際に分析したり、読み聞かせにふさわしい教材を探し実際に読み聞かせを行なう等、活動的側面も重視している。

授業実践の具体的なテーマと内容の概要は表 1 の通りである。

3. ふりかえりから見えてくるもの

では、この授業実践後の学生のふりかえりからはどのような気づきや学びが見られたのだろうか。毎回の授業後に行なっている自由記述式ふりかえりシートに見られた学生の気づきと学びをみてみたい。

【学校生活における衝突事例と解決方法】

このテーマについては、以下のように「不足している能力への気づきや内省」(1)、「外国籍児童を特別扱いすることの危険性」(2)～(4)、「保護者の直面する問題について知る必要性」(5)等が見られた。

- (1) D、I、E を用いて状況を知るときに、D と I と E が意外とこんがらがることがわかった。自分は D を読み取る力が足りないように感じたので、主観を除いた事実を把握できる力を伸ばしたいと思った。
- (2) 相手の考え方や文化の違いというものをきちんと理解しようとする姿勢が大事だと思った。これは外国籍の人との間だけではなく、日本人同士でも同じことがいえるなと感じた。
- (3) 外国人の家庭だけにサポートばかりをするのではなく、他の家庭にも同様にやることが大事だと思った。

表1 実践テーマと内容

	テーマ	内容
1	ニューカマーの抱える問題	教科、適応、言語、アイデンティティ等基本的な問題についての把握
2	学校生活における衝突事例と解決方法	異文化適応の衝突の事例を分析しながら、DIEメソッドでの解決方法を考える
3	発達とアイデンティティ	アイデンティティと発達についての理論およびディスカッション
4	異文化適応のモデル	ベリーのモデルと事例についてのディスカッション
5	国際理解教育の現場への実践例	アイデンティティと発達、異文化適応のモデルをもとに、国際理解教育における実践事例の提案
6	中国の教科書分析	中国の小学校教科書（品德と生活）の分析
7	バイリンガリズムの理論	4種類のバイリンガリズムについて
8	母語の発達	読み聞かせの効用と母語の発達について
9	読み聞かせ発表	5歳児にふさわしい読み聞かせの絵本を選び発表
10	カミンズの二言語共有説	二言語共有説についてのディスカッション
11	カミンズのモデル	場面、認知度の軸によるモデルとディスカッション
12	教育現場での教材例	外国籍児童を対象とした教材例など
13	外国籍児童生徒をとりまく環境について	ランドレイとアラードのモデルをもとにディスカッション
14	今後支援していくために必要なサポートは	ディスカッション

(4) 過剰調節、過少調節を聞いたときに、あまり特別視するのも良くないと思った。

(5) 外国籍児童生徒にばかり目がいきがちだが、その保護者が直面する問題も沢山あることに気づいた。

【発達とアイデンティティ】

このテーマのふりかえりからは、「理論への問い直し」が見られた。

(1) 私の場合は、9歳から11歳未満で考えたときに「違いは認められても」というところでひっかかりました。違いには気づくけれど、その違いをすんなり認められない気がする。もっと小さいうち（小学校低学年）になら違いを違いとしても受け入れられるような気がしました。だからこそ小さいころからの国際交流が大切だと思いました。

【国際理解教育の現場への実践例】

このテーマのふりかえりからは「外国籍児童のことを自分のこととして捉える当事者性

への気づき」(1), (5), 「個々の内面を見ていくことの重要性」(2)「理解しようとすることの大切さ」(3), 「子どもを多様な観点からみることの大切さへの気づき」(4), 「子どもに向き合うことの大切さ」(6), 「選択肢を持つ教師の大切さ」(7), 「子どもへの共感の大切さ」(8), 「ディスカッションによる相互の学び」(10)(11), 「理論から学ぶ限界」(12)がみられた。

- (1) 異文化間で経験をした外国籍の子どもや帰国生には、それぞれの文化体験にまつわる様々な要因が影響してその子を創っているように私たちが今の自分できあがるまでに様々な要因が影響しているのではないかと彼らを自分に重ねながら考えました。
- (2) ベリーのモデルにおいてもその子の中でそれは不変的ではなく、時間がたつにつれて様々な変化していくのだと思いました。交流するときどうしても国のことばかり焦点がおかれがちですが、それでは〇〇人というラベルが消えません。そうではなくて個々の内面を見てそこから交流していくやり方の方がずっと中身があるし、続いていくと思いました。
- (3) 考えさせられたのは②のグループ。本人の意思と実際の状況が異なってしまっているとき、教師や周りの人はその子がどう考えているかどう思っているのか完璧に知ることはできずどうしても見たところからしか判断できない。ただ見るだけではその子の本当の状態を知ることができないと思った。その子を知ろう、理解しようとするのが大切だと思う。
- (4) 子どもとの信頼関係を築くことが支援をする上で大切だと思う。日記でのやりとりとか日常生活の中で少しでもいいから子どもと話すことが大事に成ってくると思います。子どもの行動を様々な視点から見ることでその行動の真の意味がよく見えてくると思った。
- (5) 事例を読んで要点を抜き出すのではなく文章を書いているその子を思い浮かべ、気持ちを考えようとする姿勢が大事だということに気づいた。
- (6) 異文化体験の背後にあるものを考えていくこともとても大事なことであるが、そういった面ばかりにとらわれすぎず、しっかりと体験者本人と向き合っていくことも大切だなと改めて思った。
- (7) 授業で聞いて様々な選択肢をもつ教師、生徒にとってもサポーターになりたいと感じました。人は必ず成長する、そう信じて突き進む強さ、そんな強い信念を持てる人間になりたいと感じました。
- (8) 事例から教師の支援を考えるということをして、子どもの支援を考えるときに大切だと思うことは子どもがどんな状況に置かれていてどんな気持ちでいるのか、どうなりたいかということ把握することだ。ただ、具体的な支援について考えることまでできなかった。
- (9) 事例を読むことでその子の状態や気持ちを把握することは思った以上に難しかった。支援は口でいうのは簡単だけれど難しいと思った。
- (10) 話し合っていくたびにパズルが出来上がる感じがしてとても楽しかった。教師だけ

ではなく周囲の人の支援も大切だ。

- (11) グループのメンバーと事例に出てきた子どもがどのような状態であるかを話すことを通してベリーのモデルの理解が深まった。このようなことを覚える必要があるのは子どもの状態を分析することで有効な解決方法を考えることができるからだろうと思う。
- (12) 事例の短い文章では当事者をとりまくまわりの環境やこれから帰国するののかどうか気持ちなどの細かいところがわからず推測になってしまうところがあり、大変だった。

【中国の学校の教科書分析】

このテーマからは、中国における教育の仕方についての気づきが見られた。

- (1) 中国では人とのつながりを大切にしていることが教科書からわかった。
- (2) しつこくを教育の場をつかって教えるところがおもしろいなと思った。
- (3) 共同作業を強く全面に押し出したり年上を敬うことやお年寄りを大切にするなど重視させていたと思う。
- (4) 協力ということについて重点的に教育していると思った。
- (5) 年長者が座ってから自分が座ることや食べものも年上の人から食べるようにすすめるという礼儀は日本とは違うと思った。本を分析しながら正しいか正しくないかを教えることは人間の価値観を創り上げているプロセスだと感じた。

【バイリンガリズムの理論】

このテーマからは「実際の地域での外国籍児童生徒への支援の活動の批判的内省」(2)、(3)、「これまでの異文化体験への内省」(4)、バイリンガリズムのマイナス面への気づき(1)(5)が見られた。

- (1) バイリンガルという言葉に少しあこがれていた部分もあったが必ずしもよいことばかりではないことを学んだ。
- (2) 地域の外国籍の子どもの支援で、会話がスムーズにできるとこの子は日本語に問題がないなと思ってしまったり逆に会話があまり出来ていないと日本語が全然出来ないのだなと捉えてしまっていた。しかし、こちらの一方的な主観で勘違いしてしまことはとても危険だと思った。
- (3) 言葉がアイデンティティを支えているといっても過言ではなく話したいことが話せるということの重要性を感じ取りました。しかし、Mちゃんの時のように話さなくても心の中では想像する以上のことを口にしようと思っていて、それができずにもどかしい気持ちになっている子どもの存在も忘れてはならないと思った。
- (4) 外国でいろいろな家庭のケースを見てきたが、それは聴解型バイリンガルだということがわかった。
- (5) バイリンガルといっても言語の発達状況によってはマイナスになってしまうということを知ってバイリンガルにはよい面だけではなく、悪い面もあるのだと思いました。

【母語の発達（読み聞かせの効用）】

このテーマからは「子どもの能力の発達の育成」への気づきと学びが見られた。

- (1) 子どもに読み聞かせをすることは、子どもにとってただ単に言葉を聞くということではなく、言葉を聞くとともに本にのっている絵や語り手の声のトーンからいろいろなことを感じ取り、想像したりイメージを膨らませたりといろいろな能力の発達につながるのだと、授業の実践から気がついた。
- (2) 絵本は、絵から話を読み取ることができると同時に耳からもお話が入ってくるのもで、様々な感覚をつかって頭がフル回転になるものなんだと思いました。
- (3) 絵本の読み聞かせをしてもらいながら続きの展開を予想するという作業は、とても新鮮で脳が活性化したような気がしました。
- (4) 活動を通じて、読み聞かせによる想像力、予測力発達の効果を実感した。感情面から言語面まで読み聞かせによってつけられる力に驚いた。
- (5) 感情をこめて読むのはとても難しいことだと思った。
- (6) 子どもに何の力をつけられるのかまで考えて読み聞かせしていきたい。

【読み聞かせ発表】

このテーマからは、絵本が「子どもの発達をどう促しているか」についての気づきが見られた。具体的には「周囲との関わり」(2), 「他者との相互作用」(2), 「情動面での発達」(1), (7), (4), 「ことばの獲得」(4), 「考える力」(3)の育成を促していることへの気づきが見られた。

- (1) やはりどんな本でも内容が興味をひくものでないと子どもにとって面白くないかなあと感じました。気持ちを育てる本がたくさんあると思った。
- (2) 多くの絵本に、「他者にどう働きかけるか」というテーマを感じた。5, 6歳はまだ世界は自分中心に回っていると思っている子が多いと思うが、そこに他者も自分と同じようにものを考え喜怒哀楽があるということを感じさせる働きがあると感じた。自分とまわりの世界が地つながりであることを気づかせてくれる内容が盛り込まれていると思う。
- (3) どんな絵本でも何かしら子どもの考える力を育てる要素が含まれていると思った。
- (4) 絵本は大人にとっても成長をうながしてくれたり優しい気持ちにしてくれる葉のようなものだった。言葉や様々な感情を獲得していく子どもにとって絵本はその手助けをしたり確認することにもなると思いました。
- (5) 読み聞かせによって親や大人の愛情を受けるのはもちろんのこと、様々な力を身につけることができる。絵本が持つ無限の力というものを感じ取った。
- (6) 絵本はストーリーを読むためにあるという機能のみしか今まで考えてこなかったけれど、「身につく力は何か」という視点を加えることによって絵本を分析し、自分なりに解釈して作者も様々な工夫を凝らしながらメッセージを伝えようとしているということに気づいた。

- (7) 絵本は言語や表現だけではなく、言葉では表現できないような感情、気持ちもすぐ子どもたちに入ってくるというのがすごい力を持っていると思う。

【カミンズの二言語共有説】

このテーマからは「当事者性の必要性」への気づきが見られた。

- (1) 私は二言語バランス説のように一つを学んだら一つがなくなるということはないだろうと思っていた。けれど他の人の意見で「植民地化のように押し付けられたらどうだろう」「小さい子はどうだろう」という意見があり、自分のこととして捉えてしまっていたことを反省した。日本語が生活上必要だという意識がないうちに学んだ子どもたちにとって状況は別である。

【外国籍児童生徒をとりまく環境について】

このテーマからは「モデルと現実のギャップの可能性への気づき」(1)、「当事者側に立った支援の必要性への気づき」(2)、「個を重視すること」「生徒の背景を知ることの必要性」(3)が挙げられた。

- (1) 巨視型モデルですが、どのレベルも複雑に絡み合っていると思いました。学校、家庭、コミュニティのサポートが根本的に必要だと思いますが、その子自身に日本語を学びたいとか日本の子どもと友達になりたいという気持ちがなければそういったサポートを無理矢理進めるのも無意味になってしまうし、いきなり来日後に日本語を学びなさいと強制するのもどうかと思いました。
- (2) モデルからは、社会心理的、心理的レベルでの活動が重要だと思った。しかし、例えば滞在期間が短く、子どもが日本という未知の世界に興味を示さない場合、どのような支援があるのだろうかという疑問に感じました。支援される側にとって支援を受けたいことが何なのか？ 必要な支援とは何か？を考えると求められる支援は相手の様々な要因によって変化するように思います。学校に通っていない低年齢への子どもにはこのモデルをどう当てはめて支援したらいいかなと考えています。
- (3) 今まで外国籍の児童の支援に関して学校の中でどのように教え、教材を選ぶかということばかりに目がいってしまっていたが、それだけではなく言語の社会的レベル、社会心理的レベル、また個人の心理的レベルといった部分も言語習得に大きく影響するのだということがわかった。一人一人の子どもの背景にあるものや内面、心情を考慮した上での支援をしなければ、単に言語を習得しても本質的な習得につながらないのかなと思った。

【教育現場での実践】

このテーマについては「教師の工夫の必要性」(1)、「具体物、視覚的な教材の必要性」(2)、「生活言語を取り入れた授業の工夫」(3)、「子どもの意欲の大切さ」(4)が挙げられた。

- (1) 教師が様々な工夫をすることによって児童の学習意欲が上がり、学習能力も上がるのだと思う。
- (2) 理屈のように教えるのではなくいかに子どもが納得して学習できるようにするため

には具体的なものや視覚でわかるものが必要なのだと思った。

- (3) 日常何気なくつかう言葉をカルタなど用いて教えることで、楽しみながら言葉を身につけることができると思った。
- (4) 子どもには、日本語をもっと使いたいな、もっと知りたいなと思わせることが大切なことの一つだと思いました。

4. まとめ

では、これらのふりかえりからの受講者たちの学びや気づきをまとめるとどうなるだろうか。

まず、子どもの発達という側面からは、周囲との関わりや他者との相互作用の大切さ、情動面での発達の大切さ、ことばの獲得や考える力の育成の大切さについての気づきが見られた。子どもの捉え方という側面については、個を重視することの重要性、多様な観点から子どもを捉えていくことの大切さ、子ども自身だけではなく背景を知ることの重要性についての気づきが見られた。

支援のあり方については、当事者側に立った支援、当事者性の大切さ、子どもに向き合っていくこと、意欲を引き出していくことの重要性や共感の大切さが挙げられた。具体的な支援の仕方については、具体物や視覚的な教材の必要性、生活言語を取り入れた教材の工夫などが挙げられた。また選択肢を持った教師の必要性が挙げられた。また、支援の落とし穴として子どもを特別扱いすることの危険性や、子どもだけではなく保護者にも目を向けていくことの大切さが挙げられた。

これまでの活動の内省という観点に関しては、これまでの異文化体験や、地域での外国籍児童支援の活動の体験からの批判的内省も見られた。

また、講義で学ぶ理論の限界としては、モデルと現実のギャップの可能性への気づきの大切さや理論から学ぶ限界、バイリンガリズムのマイナス面へも目を向けていくことの必要性が挙げられた。

これらの気づきから、受講者は子どもの発達や支援のあり方について認知的な側面だけではなく、行動的、情動的な側面においても気づきや学びがあったことがうかがわれる。他に具体的な支援のあり方への提案もみられた。また、この授業自体がこれまでの体験や活動への批判的内省の役割を担っていたことも気づきから示唆できる。さらに、支援自体の落とし穴や理論の限界に触れる等、支援の場や講義自体の限界にも触れるなど批判的な視点の気づきも見られた。

今後の課題としては、子どもの発達や支援のあり方に関する認知的、行動的、情動的な気づきを更に深めていく内容や方法を実践していくと同時に、授業自体を学外等地域での外国籍児童支援の活動を更に批判的な内省の場として位置づけ、批判的な内省力を養うと共に現場や理論自体についても批判的に問い直していく力を養っていくことが挙げられる。また、子どもをとりまく環境や歴史的背景などマクロな側面にもつなげていくことも今後の課題である。

(2008年6月27日 受付)